「うたたね」の語彙

若林俊英

一

本稿は、「十六夜日記」の作者として知られる阿仏の若き日の日記である「うたたね」の自立語語彙に関して、その使用実態をいささかまとめたものである。

「うたたね」は、

『源氏物語』などの古典の影響を受けた描写や表現などから、虚構化の作意を窺うこともできるが、それ以上に、行文からほとばしる激しく情熱的な作者の心の動きや衝動的な行動が、みずみずしい魅力となって読者をうつ。…（略）…『十六夜日記』にはない、純粋で若々しい情熱をたたえた秀作として、近年の評価は高い[1]

とされる作品でもあるので、「十六夜日記」の語彙とも比較したい。

「うたたね」の使用語彙の性格については、既に、酒井憲二氏によって詳細な論が発表されている[2]が、これに導かれ、以下、いささか考えていくことにする。

語彙調査をするに当たっての単位語のとり方については、宮島達夫氏編『古典対照語い表』（昭和四六年九月、笠間書院。以下、『語い表』と略称する）[3]における認定基準を、おおむね使用させていただいた。また、語数調査に関しては、次田香澄・酒井憲二氏編著『うたゝね　本文および総索引』（昭和五一年二月、笠間書院。底本は、東山御文庫本『うたゝね』）によった。なお、以下、語数に関しては、特に注記しない限り、異なり語数とする。

二

まず、品詞別構成比についてみることにする。

表（1）

	名詞	動詞	形容	形動	副詞	連体	接続	感動	他	合　計
異なり語数	447	354	93	44	59	4	2	2	4	1,009
%	44.3	35.1	9.2	4.4	5.8	0.4	0.2	0.2	0.4	100.0
延べ語数	1,167	799	279	103	187	33	6	4	4	2,582
%	45.2	30.9	10.8	4.0	7.2	1.3	0.2	0.2	0.2	100.0

表(1)に示したのが、「うたたね」の品詞別異なり語数・延べ語数、および、それぞれにおける品詞別構成比率である。以下、ここに示した異なり語数での数値を『語い表』所載の一四作品、および、かつて調査した（以下、前稿と略称する）[4]「十六夜日記」におけるそれらと比較することにする。

「うたたね」の名詞の比率は、中世の「方丈記」（五七・五パーセント）、「徒然草」（五九・一パーセント）はもとより、阿仏作の「十六夜日記」（五四・五パーセント）における数値より相当に低く、中古の「竹取物語」（四四・三パーセント）、「源氏物語」（四二・五パーセント）に近似したものとなっている。また、「十六夜日記」の比率が「紫式部日記」や「更級日記」に比較的近似している点を、前稿で指摘したが、「うたたね」においては、日記の中でも特に「蜻蛉日記」（四七・一パーセント）と、比較的近似した数値となっている点は、注目に値する。次に、動詞についてみると、「後撰和歌集」（三四・八パーセント）、「更級日記」（三五・五パーセント）、「枕草子」（三四・七パーセント）、「紫式部日記」（三三・九パーセント）、「古今和歌集」（三三・〇パーセント）に近似した数値となっている。この点、中世の「方丈記」（二九・二パーセント）、「徒然草」（二九・四パーセント）や、上代の「万葉集」（三一・五パーセント）、中古の「伊勢物語」（三一・九パーセント）、「土佐日記」（三〇・六パーセント）、「古今和歌集」に近似した数値をとる「十六夜日記」と相違がみうけられる。形容語類（形容詞・形容動詞・副詞・連体詞）における比率をみると、「うたたね」は一九・八パーセントとなる。この数値は、「十六夜日記」および『語い表』所載一四作品における同様の数値のどれよりも高いものであることがわかる。ただし、「紫式部日記」（一五・〇パーセント）、「更級日記」（一四・九パーセント）、「蜻蛉日記」（一四・一パーセント）の日記類や、「竹取物語」（一四・六パーセント）に相対的に近似したものとなっている点、注目に値する。なお、「十六夜日記」の値（一三・九パーセント）が上掲諸作品に、より近似したものとなっている点も見逃せないであろう。

次に、延べ語数での比率についてみることにする。

まず、名詞についてみると、「竹取物語」（四五・〇パーセント）、「枕草子」（四四・二パーセント）、「更級日記」（四六・八パーセント）に近似したものとなっているが、この点は、『語い表』所載一四作品における同様の数値のどれよりも高い「十六夜日記」と大きな相

違が存する。次に、動詞についてみると、『語い表』所載一四作品中、「方丈記」（二九・七パーセント）、「大鏡」（二九・六パーセント）、「紫式部日記」（二八・二パーセント）を除く一一作品が「うたたね」より高い数値であることがわかる。また、上掲三作品、「徒然草」（三二・五パーセント）、「枕草子」（三二・七パーセント）、「源氏物語」（三二・九パーセント）、および「十六夜日記」（三〇・一パーセント）に近似した数値であることもわかった。形容語類をみると、「うたたね」は二三・三パーセントとなり、「枕草子」（二二・八パーセント）、「源氏物語」（二五・〇パーセント）に近似した数値であることがわかる。また、「蜻蛉日記」（二〇・四パーセント）や「紫式部日記」（一九・一パーセント）にも、比較的近似しているとも言えそうである。

以上、「うたたね」の品詞別構成比についてみてきたが、異なり語数においては、「竹取物語」「源氏物語」や「蜻蛉日記」「紫式部日記」「更級日記」に、延べ語数においては、「源氏物語」「枕草子」「蜻蛉日記」「紫式部日記」「十六夜日記」に、それぞれ近似していることがわかった。これは、王朝女流日記文学の系列にある[5]「うたたね」の性格が、その使用語彙にあらわれた、必然的な結果であるとみなし得る。

三

次に、異なり語数と延べ語数における品詞別構成比の関係について、いささかふれたい。

表(2)は、「うたたね」および「十六夜日記」における異なり語数・延べ語数での品詞別構成比に関して、異なり語数での比率を一とした場合の、延べ語数での比率をまとめたものである。

前稿でもふれたように、『語い表』所載一四作品における一般的傾向は、名詞・形容動詞においては異なり語数での、形容詞・副詞・連体詞においては延べ語数での比率が高い。ところが、表(2)によれば、「うたたね」における名詞、また、「十六夜日記」における形容詞が、前述の一般的傾向とは相違していることがわかる。

前稿でふれた「夜の鶴」も、名詞の使用が一般的傾向とは異なっていた。筆者は、その因を高頻度語に求めることを得た。では、「うたたね」の場合は、「夜の鶴」と同様に考えることができるのであろうか。以下、考えたい。

前稿と比較する都合上、高頻度語を累積使用率二七パーセント程度とすると、「うたたね」における高頻度語は、異なり語数三二、延べ語数七一三となる（累積使用率は二七・六一パーセント）。このうち名詞は、異なり語数で一三、品詞別構成

表（2）

	名　詞	動　詞	形容詞	形　動	副　詞	連体詞	その他
うたたね	1.020	0.880	1.174	0.909	1.241	3.250	0.683
十六夜日記	0.983	0.962	0.926	0.903	1.459	5.333	0.368

表（3）

	異語数	延語数	名詞異語	名詞異％	名詞延語	名詞延％
1～3	41	805	17	41.46	345	42.86
4～6	185	839	88	47.57	411	48.99
7～	783	938	342	43.68	411	43.82
計	1,009	2,582	447	44.30	1,167	45.20

比率四〇・六パーセント、延べ語数で三〇四、品詞別構成比率四二・六パーセントとなる。したがって、延べ語数における比率と異なり語数における比率との差は二ポイントとなる。また、「うたたね」全体における名詞の異なり語数・延べ語数における比率は、表(1)に示したように、それぞれ四四・三パーセント、四五・二パーセントであり、その差は〇・九ポイントとなることがわかる。

以上から、「うたたね」の名詞に関しては、

1　異なり語数・延べ語数のいずれも全体での比率が、高頻度語における比率よりも高い

2　延べ語数の比率と異なり語数の比率との差は、高頻度語における値の方が大きい

のような点が指摘できる。

一方、「夜の鶴」についてみると、異なり語数においては全体での比率の方が五・三ポイント、延べ語数においては高頻度語での比率の方が二・三ポイント、それぞれ高くなっている。

2にふれたように「うたたね」においては、延べ語数における名詞の比率と異なり語数におけるそれの比率との差は、高頻度語における方が一・一ポイント大きい。この点からすると、高頻度語が全体における名詞の延べ語数の比率の高さにも関係があることがわかる。しかし、「夜の鶴」においてみられるような明確なものとはなっていない。では、中位段階、または、下位段階の名詞の使用が、全体に対して影響を与えているのであろうか。以下、この点についてふれる。

表(3)は、「うたたね」の使用語彙に関して、その累積使用率により一〇段階に分け、便宜的に、一～三段階を上位段階、四～六段階を中位段階、七～一〇段階を下位段階とし、各段階に所属する語の異なり語数・延べ語数を、各段階に所属する名詞の異なり語数・延べ語数、各段階所属語に対する名詞の比率とともにまとめたものである。

この表(3)をみる限り、中位段階においても上位段階と顕著な差は見出し得ない。ただし、下位段階においては、異なり語数における比率と延べ語数におけるそれとの差が、上位段階・中位段階の場合より小さく、多少の相違が感じられるものとなっている。

以上、異なり語数・延べ語数での品詞別構成比に関する一般的傾向と相違している「うたたね」の名詞に関して、いささかみてきた。その結果、上位段階・中位段階における名詞の頻用傾向が全体に関係しているであろう点、ただし、「夜の鶴」ほど明確なものとなっていない点は確認できた。しかし、一般的傾向との相違がどのような理由に

よるのかは、明確には指摘し得なかった。この点については、今後の課題としたい。

四

次に、語種別構成比について、いささかふれたい。

表(4)、表(5)は、「うたたね」、「十六夜日記」の語彙に関して、語種別の異なり語数・延べ語数を、それぞれの構成比率とともに示したものである。これらの表を一瞥してわかることは、「うたたね」における和語の比率が、「十六夜日記」におけるそれよりも、異なり語数・延べ語数のいずれにおいても高く、逆に、漢語の比率は、いずれにおいても低くなるということであろう。では、このような「うたたね」の語種別構成比率は、他作品と比較した場合、どのように位置づけられるのかを、例によって『語い表』を使用し、考えることにする。

『語い表』所載一四作品のうち、「うたたね」よりも和語の比率の高いものは、「古今和歌集」(九九・七パーセント)、「万葉集」「後撰和歌集」(いずれも九九・六パーセント)の三作品である。これらは、いずれも和歌集である点、特徴的である。次に近似しているものとして、「土左日記」(九四・一パーセント)、「伊勢物語」(九三・七パーセント)を指摘できるが、いずれも相当な差が存する。一方、「十六夜日記」における和語の比率は、前掲した「土左日記」「伊勢物語」の二作品に加え、「竹取物語」(九一・七パーセント)、「蜻蛉日記」(九一・一パーセント)、「更級日記」(九〇・七パーセント)にも比較的近似しており、「うたたね」との差が感じられるものとなっている。

「うたたね」の使用語彙における和語の比率の高さについては、上掲した通りであるが、その要因としては、漢語の比率の低さも間接的に関係していると思われる。以下、「うたたね」の漢語語彙に関して、「十六夜日記」のそれと比較したい。

表(4)

	和　語	漢　語	混種語	合　計
異なり語数	979	24	6	1,009
%	97.0	2.4	0.6	100.0
延べ語数	2,535	40	7	2,582
%	98.2	1.5	0.3	100.0

表(5)

	和　語	漢　語	混種語	合　計
異なり語数	1,151	83	9	1,243
%	92.6	6.7	0.7	100.0
延べ語数	3,277	115	9	3,401
%	96.4	3.4	0.3	100.1

「うたたね」に使用された漢語は、表4において示したように、異なり語数で二四存するが、うち、

「きやう（京）」「きやう（経）」「けしき（気色）」「ごぜん（御前）」「ずいじん（随身）」「ほい（本意）」「やう（様）」「よういう（用意）」「れい（例）」「ゑ（絵）」

の一〇語が、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学の基本語彙」（以下、「平安和文基本語彙」と略称する）[6]と一致する。一方、「十六夜日記」においては、異なり語数八三のうち

「あざり（阿闍梨）」「いち（一）」「きやう（経）」「ぎやうかう（行幸）」「くわうたいこうぐう（皇太后宮）」「さいぐう（斎宮）」「さいしやう（宰相）」「さう（左右）」「さうし（草子）」「さんみ（三位）」「じじゆう（侍従）」「たいふ（大夫）」「ちゆうじやう（中将）」「ちゆうなごん（中納言）」「にふだう（入道）」「にようゐん（女院）」「ほい（本意）」「やう（様）」「れい（例）」「ゐん（院）」「ゑ（絵）」

の二一語が、「平安和文基本語彙」と一致するが、この数値だけでも、「うたたね」と「十六夜日記」との漢語の使用には大きな相違が存することがわかる。

ところで、「平安和文基本語彙」ではない「うたたね」の漢語語彙一四語のうち、

「あんかもんゐん（安嘉門院）」「しやうじ（障子）」「せかいふらうこ（世皆不牢固）」「せぬれい」「ほふこんがうゐん（法金剛院）」「ほふりん（法輪）」「りやうじゆせん（霊鷲山）」

の七語が「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」の四作品と共通しない点は、非常に特徴的である。また、この七語のうち、「せかいふらうこ」「ほふこんがうゐん」「ほふりん」「りやうじゆせん」の四語が仏教に関するものである点にも注意を要するであろう。

これに対して、「十六夜日記」の漢語には、暦日に関するものが多い点（一三語）、前稿において指摘した。また、「十六夜日記」には、

「あざり（阿闍梨）」「あんかもんゐん（安嘉門院）」「うひやうゑ（右兵衛）」「くはとくもんゐん（和徳門院）」「くわうたいこうぐう（皇太后宮）」「ごんちゆうなごん（権中納言）」「さいぎやう（西行）」「さいぐう（斎宮）」「さいしやう（宰相）」「さんみ（三位）」「しきかむもんゐん（式乾門院）」「しゆんぜい（俊成）」「しんちゆうなごん（新中納言）」「じじゆう（侍従）」「そうじやう（僧正）」「だいじやうだいじん（太政大臣）」「たいふ（大夫）」「だいぶ（大夫）」「ちゆうしん（忠臣）」「ちゆうじやう（中将）」「ちゆうなごん（中納言）」「ぢとう（地頭）」「ていか（定家）」「にふだう（入道）」「にふだうだいなごん（入道大納言）」「にようゐん（女院）」「みんぶきやう（民部卿）」「りつし（律師）」

のような人物・官職、および、それに類する語が多数使用されていることも指摘できる。一方、「うたたね」においては、人物関係の漢語は「あんかもんゐん（安嘉門院）」「ずいじん（随身）」程度しか使用されていない。

社会の動きに関心を持たざるを得ない「十六夜日記」と、恋愛の顚末を描く「うたたね」との内容・素材の差が、人物関係漢語の使用の、このような差となったとも言えよう。

以上、「うたたね」の使用語彙の語種別構成比についてみたが、

1　和語の比率が非常に高い。『語い表』所載一四作品中、「うたたね」よりも和語の比率の高いものは、和歌集である「万葉集」「古今和歌集」「後撰和歌集」の三作品に限られる。この点は、特徴的である

2　「平安和文基本語彙」と共通する漢語語彙が、「十六夜日記」の場合に比べ、比較的多い

3　「平安和文基本語彙」と共通しない漢語語彙一四語のうち、「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」の四作品と共通しないものは七語存する。うち四語は、仏教関係の語である

4　「うたたね」には人物関係の漢語がほとんど使用されず、頻用された「十六夜日記」の場合と大きな相違がみられるが、この差は、「うたたね」と「十六夜日記」との内容・素材の差に基づくものである

のような点がわかった。

中世の作品でありながら「うたたね」には漢語が非常に少ない。自己の恋愛交渉の状況は、伝統的な手法によって朧化・浪漫化し、失恋に終ったとはいいながら、自己及び愛人を平安朝物語中の登場人物の位置におき、引歌や物語を豊富に使って美的夢幻的に描き出している[7]

と言われるように、阿仏は、その日記「うたたね」によって平安朝を再現しようとした。そのために、漢語の使用を極力避け、結果的に、漢語語彙の構成比率が低いものとなったのであろう。

五

次に、「うたたね」に使用された形容詞について、類似度D'の点[8]から考えることにする。

表(6)は、「うたたね」および「十六夜日記」の使用語彙と、「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」の使用語彙との類似度D'をまとめたものである。これによると、「うたたね」と各作品との類似度D'の数値は、「十六夜日記」と各作品との類似度D'の数値より、それぞれ高いことがわかる。したがって、使用語彙全体でみた場合、「うたたね」の方が「十六夜日記」よりも、「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」に、より類似しているということになる。ここに、「蜻蛉日記」「更級日記」の系列に属する「うたたね」の性格をみることができよう。この点は、形容詞において、より強調された形であらわれると思われるので、以下、形容詞に限定して類似度D'をみることにする。

表(7)は、「うたたね」および「十六夜日記」と、「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」の各作品に使用された形容詞に関

表（6）

	うたたね	十六夜日記
蜻蛉日記	0.744	0.724
源氏物語	0.747	0.731
紫式部日記	0.596	0.585
更級日記	0.701	0.694
十六夜日記	0.685	

表（7）

	うたたね	十六夜日記
蜻蛉日記	0.810	0.769
源氏物語	0.808	0.762
紫式部日記	0.746	0.692
更級日記	0.807	0.700
十六夜日記	0.767	

する類似度D'の数値をまとめたものである。この表(7)と、先にみた表(6)からは、以下のような諸点が指摘できるであろう。

1　「うたたね」および「十六夜日記」と、各作品との形容詞における類似度D'は、それらの全使用語彙における類似度D'の数値より、それぞれ高い

2　「うたたね」と各作品との形容詞における類似度D'の数値は、「十六夜日記」と各作品との形容詞における類似度D'の数値より、それぞれ高い

3　「うたたね」と各作品との形容詞における類似度D'の数値と、「十六夜日記」と各作品との形容詞における類似度D'の数値との差は、それらの全使用語彙における類似度D'の数値に関する同様の差よりも、それぞれ大きい

4　「うたたね」および「十六夜日記」と、「紫式部日記」との類似度D'の数値は、全使用語彙の場合も形容詞に関する場合も、「うたたね」と「十六夜日記」との類似度D'の数値より、それぞれ低い

のような諸点が指摘できよう。また、3の差に関しては、

5　「うたたね」と各作品との全使用語彙における類似度D'の数値と、「十六夜日記」と各作品との全使用語彙における類似度D'の数値との差は、対象とする四作品の成立年代が新しいものほど小さい。また、形容詞に関するそれは、対象とする四作品の成立年代が新しいものほど大きい

という、興味深い結果が出ている。

以上のような諸点から、「うたたね」は、類似度D'の面でも、平安女流日記文学の系列につらなることがわかった。と同時に、諸先学も説かれるように[9]、「十六夜日記」が平安女流日記文学の系列とは少し距離を置いたものとなっていることも確認できた。

六

次に、「平安和文基本語彙」と比較することにより、「うたたね」の語彙の性格の一端をみたい。

表(8)は、「うたたね」の語彙と、大野晋氏が示された「平安時代和文脈系文学」(以下、「平安和文」と略称する)[10]の語彙とを、それぞれ累積使用率によって一〇段階に分け、「うたたね」の累積使用率約五〇パーセントに当たる部分と、「平安和文基本語彙」に関する部分とを抜き出し、前者を基準にして段階別に所属語数を示したものである。したがって、「平安和文」の語彙に関しては、その累積使用率からして、八段階の一部まで示したことになる。なお、表中の「非共通」とは、「平安和文基本語彙」と共通しないという意味であり、「平安和文」の語彙に、その使用例が存しないという意味ではない点、一言つけ加えておく。

以下、この表(8)により、「うたたね」の語彙における特異な使用語について考えたい。

どのような語をもって特異な語とするかについては、より慎重に考える必要があろうが、前稿と比較する関係上、ここでは、「うたたね」の語彙における所属段階と「平安和文」の語彙における所属段階との差が、上、下各二段階以上のものをもって、仮に特異な使用語とする。ここでみる特異な使用語を、右のように規定すると、「うたたね」におけるそれは、

I　「うたたね」の語彙における所属段階の方が上位のもの

「ここち(心地)」「こころぼそし(心細)」「ところ(所)」「み(身)」「あめ(雨)」「うし(憂)」「おと(音)」「く(来)」「ちかし(近)」「なみだ(涙)」「みやこ(都)」「やま(山)」「ゆく(行)」「ゆめ(夢)」「いづく(何処)」「いのち(命)」「おもひつづく(思続)」「かきくらす(掻暗)」「かは(川)」「さき(先・前)」「ただいま(只今)」「ひかり(光)」「ひとしれず(知)」「あと(跡)」「おもひたつ(思立)」「たより(便)」「つくづくと」「とどまる(止・留)」

表(8)

	「平安和文」の語彙における段階								非共通
	1	2	3	4	5	6	7	8	
1	2	3	1	0	0	0	0	0	0
2	4	2	2	2	0	1	0	0	0
3	0	4	5	5	6	3	1	0	0
4	0	0	5	6	9	4	1	4	2
5	0	1	4	6	13	11	3	4	3
合計	6	10	17	19	28	19	5	8	5

「はるか(遥)」「ふるさと(故郷)」

II　「うたたね」の語彙における所属段階の方が下位のもの

「いま(今)」「かかり(斯有)」「かく(斯)」「きこゆ(聞)」「なほ(猶)」

のように、Iに三〇語、IIに五語、それぞれ存することになる。

Iに属する三〇語のうち、前稿でみた「十六夜日記」における同様の語群と共通するものは、「ところ」「みやこ」「やま」「ゆく」「ゆめ」「かは」「あと」「たより」「とどまる」「ふるさと」の一〇語であることがわかった。また、「夜の鶴」における同様の語群とは、一語も共通しないこともわかった。一方、「十六夜日記」と「夜の鶴」におい

て、「うた（歌）」「よむ（詠）」「つき（月）」「やさし（優）」「ことば（言葉）」の五語が共通する点については、前稿でふれた。

これらのことからは、日記文学である「うたたね」と紀行文学である「十六夜日記」とに共通する、素材や内容の近さをみることができるであろう。

次に、「うたたね」の語彙における所属段階の方が上位の、上掲三〇語を、『語い表』所載の各作品における「上位二〇語の表」と比較したい。

以下、共通する語と各作品における順位とを、具体的に示すと、

「ここち」　「蜻蛉日記」二〇位

「ところ」　「土佐日記」九位、「蜻蛉日記」一八位、「更級日記」一六位、「方丈記」二〇位、「徒然草」一八位

「み」　「古今和歌集」一八位、「後撰和歌集」一〇位、「方丈記」一八位

「く」　「万葉集」一七位、「伊勢物語」一八位、「古今和歌集」一四位、「土佐日記」一五位、「後撰和歌集」二〇位

「やま」　「万葉集」一四位、「古今和歌集」一三位、「後撰和歌集」一七位

「ゆく」　「万葉集」一三位

のようになる。

『語い表』所載の「上位二〇語の表」と共通するものは、上掲したように「ここち」以下の六語であるが、多くは和歌集である「万葉集」「古今和歌集」「後撰和歌集」や、女流日記文学である「蜻蛉日記」「更級日記」と共通している。この点は、「伊勢物語」や「土佐日記」のような、和歌を多数含む作品とも共通している点とともに、この語群の性格をみる上で、示唆的である。

ところで、長崎健氏は、

作者にとっては、最も日常的体験であり現実であった恋愛状況を表現し伝達する機能を当代の散文に認めていなかったのであろう。…（略）…その心情を表現として定着するために、内的照射の方法として安定した効用をもつ伝統的な和歌世界の用語と技法を用いたものであり…[11]

のように、「うたたね」における散文性の希薄さ、韻文的性格の強さを指摘しておられるが、右にみた「うたたね」の諸語は、この長崎氏のご論を語彙の面から裏づけるものとなっている。

以上、「うたたね」の語彙における所属段階の方が上位の語群をみてきた。当然といえばそれまでのことであるが、ここに属する語の多くは「うたたね」の素材・内容と密接に結びついた、「うたたね」の特徴語とでもいうものであることがわかった。

七

以上、「うたたね」に使用された自立語語彙に関して、その使用実

態をみてきた。以下、その結果を再掲することにより、本稿のまとめとしたい。

1　品詞別構成比率は、異なり語数においては「竹取物語」「源氏物語」「蜻蛉日記」「紫式部日記」「更級日記」に、延べ語数においては「源氏物語」「枕草子」「蜻蛉日記」「紫式部日記」「更級日記」に、相対的に近似している

2　品詞別構成比率について、異なり語数に関するそれと、延べ語数に関するそれとの関係からすると、「うたたね」の名詞の使用は特徴的である。高頻度語・中頻度語における名詞の頻用傾向が、その理由となっているのであろうが、かつて調査した「夜の鶴」ほど明確なものとはなっていない

3　和語の比率が非常に高い。

語種別構成比率に関して、「うたたね」と『語い表』所載一四作品とを比較してみると、「うたたね」よりも和語の比率が高いのは、「万葉集」「古今和歌集」「後撰和歌集」に限られる。

4　「平安和文基本語彙」と共通する漢語は、「十六夜日記」の場合に比べ、相対的に多い。また、共通しない漢語のうち、「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」とも共通しないものは七語存し、うち四語は仏教関係の語である。

5　「うたたね」には人物関係の漢語がほとんど使用されず、頻用された「十六夜日記」の場合と大きく相違している。この差は、「うたたね」と「十六夜日記」との内容・素材の差に基づくものと思われる

6　「うたたね」および「十六夜日記」と「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」との形容詞における類似度D'の数値は、それらの全使用語彙における類似度D'の数値より、それぞれ高い

7　「うたたね」と「蜻蛉日記」「源氏物語」「紫式部日記」「更級日記」との形容詞における類似度D'の数値は、「十六夜日記」と各作品とのそれらよりも、それぞれ高い。

8　「うたたね」の語彙における所属段階が、「平安和文」の語彙における所属段階よりも上位の語群には、当然のことではあるが、「うたたね」の素材や記述内容と密接に結びついた特徴語が多く含まれている

〔注〕

(1)　佐藤恒雄氏「うたたね」(『研究資料日本古典文学⑨』〈昭和五九年九月、明治書院〉所収)。

(2)　「『うゝたね』索引による語彙考察」(次田香澄・酒井憲二氏編著『うたゝね　本文および総索引』〈昭和五一年二月、笠間書院〉所収)。

(3)　以下、統計に関して『語い表』とした場合は、宮島達夫・中野洋・鈴木泰・石井久雄氏編『フロッピー版古典対照語い表および使用法』(平成元年九月、笠間書院)による。

（4）拙稿「『夜の鶴』の語彙」（『城西大学女子短期大学部紀要』第一四巻第一号、平成九年三月）。

（5）たとえば次田香澄氏は、「うたたね」について、

蜻蛉日記・和泉式部日記・更級日記の系列にあり、こののち『とはずがたり』に引継がれる性格の文学である

とされる（次田香澄・渡辺静子氏校注『うたゝね・竹むきが記』〈昭和五〇年六月、笠間書院〉解説一六頁）。

（6）大野晋氏「平安時代和文脈系文学の基本語彙に関する二三の問題」（『国語学』八七集、昭和四六年一二月）。

（7）（5）同書、一五頁。

（8）水谷静夫氏「用語類似度による歌謡曲仕訳『湯の町エレジー』『上海帰りのリル』及びその周辺」（『計量国語学』一二巻四号、昭和五五年三月）、同『数理言語学』（昭和五七年一月、培風館）、その他。

（9）たとえば比留間喬介氏は、

史的系列より見れば王朝時代の宮廷女流日記の系列に立つ作品であるが、その文學的價値の中心は言ふまでもなく道中記（道の記）である。…（略）…十六夜日記は中古の和歌集的紀行の傳統に、この新しい海道文學の命を吹き込んだのである

とされる（『十六夜日記』〈新註国文学叢書、昭和二六年五月、講談社〉解説七頁）。

（10）（6）同論文。ただし、大野氏は、「平安時代和文脈系文学」の基本語彙、および、対象一〇作品の総延べ語数という形で示しておられる。

（11）長崎健・濱中修氏著『行動する女性　阿仏尼』（平成八年二月、新典社）第三章、九七頁。